

わたしは主を見ました

ヨハネによる福音書 20 : 1 - 18



司祭 ヨハネ 井田 泉

2023年4月9日

復活日

京都聖三一教会にて

主イエスが葬られた墓に最初に行ったのは、マグダラのマリアでした。そして復活されたイエスに最初に出会ったのも、マグダラのマリアでした。今日のヨハネ福音書によって、その出来事を見つめたいと思います。

けれどもその前に、そのマグダラのマリアがどういう人であったかを知っておきましょう。

かつてマグダラのマリアは、重い病に苦しんでいました。その苦しみは体よりもむしろ心のほうにあったようです。自分の中に自分ではどうすることもできない何かを取りついていて、それがいつも自分を抑えつけている。それはもう「悪霊」としか言いようのないもので、しばしば勝手に自分の中で暴れ出し、手の付けられないような状態になるのでした。自分の魂は押しつぶされたようになって、恐れ、憎しみ、怒り、絶望から、自分と人を傷つけるような言葉や行動が起こってきます。

たくさんの医者にもかかり、占いやまじないをする人たちの所にも連れて行かれましたが、少しもよくなりませんでした。死のうとして死ぬこともできず、自分を責め、自分を呪い、この世を憎みました。神に救いを切に求める自分があるかと思うと、自分を救うことのできない神さえ呪うこともありました。神はこのような自分を罰するに違いない、と思っていました。

「七つの悪霊に取り憑かれている」(ルカ 8:2、マルコ 16:9)
と人は言いましたし、自分でもそう思っていました。

ところがある時、イエスという人と出会いました。イエスの話を聞いていると、これまで思ってきたような神とは違う、自分を肯定し受け入れてくれる確かな存在であるように感じました。もう他に自分が行くところはない。このイエスについて行こうと決心しました。このイエスについて行って、生きるなら生きる、死ぬなら死ぬと決めたのです。

イエスに従って歩むうちに、荒れ狂っていた自分は次第に過去のものとなり、平安と慰めと、生きる力が与えられるようになりました。イエスとの出会い、その言葉、その祈りによって、彼女は癒やされ、「七つの悪霊」は追放されたのです。

彼女は他の人と一緒に、イエスの一行のために祈り、働きました。自分は生きていてよい、自分もまた人の力となることが許されている、と感じることはこのうえない喜びでした。

しかし彼女の唯一の希望、慰め、救いであるそのイエスが、やがて不当にも捕らえられ、十字架につけられました。彼女は、他の女の人たちとともにずっと十字架のそばにいて、イエスを見つめて立っていました。イエスは絶対に間違っていない。この世の悪しき力が、権力が、神から来られた方を殺したので

す。悲しみと怒りとで彼女の心は破れてしまいそうでした。

やがてアリマタヤのヨセフとニコデモが来て、イエスの体を十字架から降ろし、墓に葬りました。墓の入り口には大きな石が転がされて穴を塞ぎました。マグダラのマリアは、ずっとその様子を見つめていました。人々が帰って行った後も、彼女はもう一人のマリアとともにそこに残り、墓の方を向いて座っていました（マタイ 27:61）。

その翌日、週の初めの日曜日の朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアはイエスの墓に行きました。そして、墓から石が取りのけてあるのを見ました。そしてイエスのご遺体がなくなっているのを知ったのです。彼女は走って、ペテロともう一人の弟子のところに行っていました。

「誰かが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、分かりません。」ヨハネ 20:2

ペテロともう一人の弟子は急いで墓に来て、イエスの体はなくて、体を包んでいた亜麻布が置いてあるのを見て、やがて家に帰って行きました。

しかしマグダラのマリアは墓の外に立って泣いていました。今さらいったいどこに行く所があるのでしょうか。唯一の希望であるイエスが殺されて死に、しかもそのご遺体がなくなってし

まった。彼女は泣きながらここに立ち続けるほかはありません。

泣きながら、もう一度身をかがめて墓の中を見ると、白い衣を着た二人の天使が見えました。本文を読んでみましょう。

「天使たちが、『婦人よ、なぜ泣いているのか』と言うと、マリアは言った。『わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。』こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。イエスは言われた。『婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。』マリアは、園丁だと思って言った。『あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。』」ヨハネ 20:13-15

そのときイエスが「マリア！」と呼びかけました。彼女は振り向いて、「ラボニ」と言いました。「先生」という意味です。

彼女はどんなに驚いたことでしょうか。どんなにうれしかったのでしょうか。なつかしい声。もう二度と会えないと思ったのに、亡骸のイエスを探していたのに、今は生きておられるイエスを見えています。彼女はイエスにすがりつきます。悲しみの涙は今喜びの涙です。イエスが生きておられる。この目で、この耳で、この手で、はっきりと確かめたのです。

「わたしにすぎりつくのはよしなさい」とイエスは微笑みながら言われました。

「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上ると。』 20:17

マグダラのマリアはイエスに言われたとおりにします。

「マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、『わたしは主を見ました』と告げ、また、主から言われたことを伝えた。」

20:18

「わたしは主を見ました」

これは単なる報告やつぶやきではありません。聖書的に言えば「証言」というものです。

「わたしは主を見ました」

これはしばらく前にイエスを見た、というただ過去のことを言っているではありません。イエスを見たこの目は今もありありとイエスを見ており、イエスの声を聞いたこの耳は今もイエスの声を聞いており、イエスに触れたこの手は今もイエスを感じている。イエスがおられる、生きておられるという事実。その感動が自分の全身を包んでいて、心が燃えているのです。どうしてこれを伝えずにいられるのでしょうか。

「わたしは主を見ました」

このように弟子たちに告げたマグダラのマリアは、わたしたちに向かって証言し呼びかけています。

「わたしは主を見ました」

主イエスは復活して、生きておられる。2000年の隔てを超えて、マグダラのマリアの証言がわたしたちの心に届きますように。

祈ります。

主イエスさま、復活されたあなたがマグダラのマリアに現れてご自身を示し、彼女の名を呼ばれたように、わたしたちにもご自身を示し、わたしたちにも呼びかけてください。わたしたちを迷いや疑いの中に放置せず、あなたが復活して今も生きておられることを教えてください。尊いあなたのみ名を賛美します。アーメン